

座談会参加者

- 石川康宏さん 神戸女学院大学文学部総合文化学科教授
憲法が輝く兵庫県政をつくる会代表幹事
- 藤野紗千さん 東神戸病院・看護師(新入職員)
- 神原健斗さん 潮江診療所・事務(新入職員)
- 北島季弥さん 尼崎医療生協病院・事務(新入職員)
- 橋本銀河さん 神戸協同病院・事務 県連青年JB実行委員
- 長浜 悠さん 神戸医薬研究所・薬剤師(東神戸病院で研修中)

橋本 わたしは毎週金曜日に関電の神戸支店前で原発反対の行動をしています。福島事故を受けて、本当に原発は必要なのかと疑問を持つようになりました。

長浜 医療従事者は患者さんの状態がよく見える立場です。戦争法案で、たとえ今すぐに戦争が起ころなくても、法案が通過することによって、命の格差が開く可能性もありますよね。戦時中はとくに医薬品も限られ、立場の弱い人たちは見捨てられていったという事実があります。

神原 新入職員研修を受けて、無言でいるということは今の政治を肯定しているということになると知って、このままではいけないと考えるようになりました。この国の現状を知り、自分たちでよりよい社会にしなければならぬという意識を同世代の人たちに持ってほしい。

石川 「無関心ではいられても無関係ではいられない」という話です。例えば消費税が上がったら、無関心な人でも自分が払う税金は増えるのです。TPPで医療は悪くなっていく。自衛隊とどこかの軍隊が戦争したら、われわれは敵国の国民になってしまう。無関心はラクかもしれないけれど、無関係ではいられない。だから政治や社会の中身はある程度ちゃんと知っておかないといけない。その大きな話題の一つが、みなさんの言われた戦争法や原発の話ですね。

藤野 患者さんのことを本当にサポートしようと思ったら、わたしたちが世の中のことを知らなければいけませんよね。寄り添うことも大切

ですが、社会に働きかけて、次につなげていくことも医療者にとって大事だと思います。



北島 選挙にいかない人が多いという現状がありますが、ふだんの会話の中でも自分の意見を

出そうとする人が少ないし、出しづらい風潮があるように思います。

橋本 最初の一步というのはなかなか難しいですね。たとえば民医連は毎年原水爆禁止世界大会に参加しているけども、実際に行って直接その人たちの声を聞くとか、体験するとまた全然ちがうと思う。ちょっと難しいかな、政治について勉強していないからと、最初から



一歩引いている感じはします。もっと気軽にみんな来たらいいのに。

石川 政治問題を考えるときに自信がもてないというのは、個人的な問題だけではなく、社会全体が若い人たちの育ちづらい、政治的教養が身に付きにくい社会になっているからですね。

でも、その状況の中で、SEALDsのように日本中からあれだけの若い人たちが、自分たちで判断して立ち上がった。今の社会はこうあるべきではないか、と言い始めている。これはすごい転機だと思います。

長浜 わたしは、去年デモに参加したときに、そんな活動には参加しないだろうなと思ってた知り合

石川康宏教授と
若手職員が対談

選挙権年齢が18歳に引き下げられる参議院選挙を前に、これまで以上に若い世代の動きが注目を集めています。4月27日、石川康宏教授と、研修での学習を終えた新入職員3人を含む若手職員5人が対談を行い、政治や社会の問題について自由に話し合いました。

無関心ではいられても
無関係ではいられない

政治と社会について



参加者の顔ぶれ 左から藤野紗千さん、神原健斗さん、北島季弥さん、石川康宏教授、橋本銀河さん、長浜悠さん

いとデモで出会う、びっくりしました。みんな無関心を装っていたかもしれないけど、実は深いところで考えていたのではないかと思います。

石川 新自由主義と言われるような、競争させて強いものが生き残って、弱いものが貧乏になるのは当たり前だというやり方で、ごく少ない人が莫大な資産を得る。その一方で、「お金がなくて大学に行けなかった」「勉強がんばったけど、奨学金の返済だらけだよ」「就職したけどブラック企業で給料15万しかない」という人がたくさんいます。

アメリカでも若い人が政治の前面に出てきているし、韓国でも同じようなことがおこっている。貧困と格差を助長するような政治に対するストレスが

原動力になっているという点は、日本にも共通してますね。若い人たちの力があれば、大きな変化が短期間に生まれる可能性がある。すごく期待がもてるなと思っています。

9条が焦点になって始まった運動だけど、ちゃんと憲法通りの政治をするのが当たり前だ、個人の尊厳を守れ、というように運動の幅が広がってきています。立憲主義って掲げる以上、憲法の全条項を守れというふうに運動がふくらんでいくと思う。つまり生存権を国が守るのは当たり前で、教育権を

国が守るのは当たり前で、人間らしい労働条件を国が守るのは当たり前、そういう社会をつくれという方向に今の運動はふくらんでいくのだと思う。戦後の政治史でたぶん初めてのことで。こんなにみんなが憲法の重要性を語っているというのは。

橋本 個人の尊厳というところで言えば、民医連はずっとそういう視点でたたかいてきたところなので、わたし自身も共感できるし、運動が広がってほしいと思います。

長浜 格差が広がって、改めて自分たちの権利について考えさせられたときに、憲法って大事だったんだなって実感する時代がきたのかなという印象を受けますね。

石川 社会の仕組みを大きく転換するきっかけになるのはやはり選挙で、この4年間、安倍政権ができてから明らかに社会は劣化している。それをなんとか転換するために「安倍政権を倒そう」と野党が手を組むという、戦後史上はじめての出来事が生まれてきている。そのきっかけは、市民の運動の中から「お前たちどうにかして倒せよ、あの政権を」という声だった。それが野党共闘をすすめる力になっている。主権者としての国民の急速な成熟が今の社会に現れていると思う。

今回の参議院選挙だけで急にすべてが変わるということではなく、長くみても再来年中には衆議院選挙があるわけだし、そうすると相当数の国会議員を入れかえることが可能になる。どういった人間に国会に行ってもらおうべきかということをきちんと学んで、それをまわりの人と語りあうことが大事ですね。

これでまた安倍政権が勝ちました、という話になったら、暴走政治は加速します。日本国憲法では個人が主人公で、国はそれを支えるものになっているのに、安倍さんの発想はまるで逆で、国家に仕える国民を育てるといいます。国家に誰もが自ら奉仕するのが美しい国ですということです。自民党の改憲案を見ると、浮かび上がるのは民主主義否定の独裁国家です。大日本帝

国憲法と治安維持法をミックスしたような改憲案が、ホームページに載っています。時代錯誤も甚だしいけど、そういう人たちに政権を任せているというのが実態なんです。

北島 報道でも与党と野党の扱いの差を感じていて、情報が操作されているのかなという印象を受けます。何が本当なのか、何を信じたいのか、わからなくなる。

石川 この間も国連から「あなたの国は報道の自由ランキング世界第72位です」と言われましたね。本当のことを国民に何も伝えてないでしょう。そういう国にますます転落していくのか、その危機を乗り越えて希望のもてる社会に進むのか、今はその分岐点です。

神原 自分で情報を発信することも大事だと思う。たとえば、メディアの報道は本当かわからなくても、ぼくの言うことだからといって、友だちが話を聞いて考えてくれるかもしれない。

藤野 民医連の仲間もたくさんいる。私たちが時代をつくっていくか。友だちや知らない人へどんな話を広げていけたらと思います。

石川 民医連は民医連としてのモノの考え方がありません。それと同時に、若いみんなはこれまでの民医連はこうだったかもしれないが、これからはこうあるべきではないかという、今の到達点をどう乗り越えていくかという角度からものを考えることが大事。組織から離れた個人としての「わたし」というのは、みんな違う人じゃないですか。方向性が近かったから、結果的に力を合わせているのであってその逆じゃないわけです。民医連という職場の方針に「わたし」を閉じ込めるのではなくて、思うこと、考えることを自由に発信しながら、共同のなかで手をつないでいく。自分の自由な発信、自由な着想というのを大事に育てながら、がんばっていきましょう。